

津軽藩の司法制度史考

黒瀧 十二郎

はじめに

一昨年長谷川成一氏が、「青森県地方史研究の成果と課題」に於いて昭和五十年以降の本県の研究を回顧し、明確にしていけない事象が多すぎるように思われ、^①実証的な史実の究明に全力を傾注することが急務であらうと指摘された。

この指摘は津軽藩の刑法研究にもあてはまり、蝦名庸一氏が発表されたもの以外に筆者の作業があるにすぎない。^②

本稿では(一)弘前市立図書館所蔵の「藩庁日記」^③の中から司法制度に関する記事を拾いあげ、制度史的に藩政中期以降の概観を試みたが、史料制約から断片的とならざるを得なかった。(二)犯罪と刑罰との対応関係については、判例によって網羅的に説明することを目的とせず、搜索から判決・刑の執行まで一連の過程としてとらえるように努めた。(三)訴訟手続は出入筋(民事訴訟)と吟味筋(刑事訴訟)と大別出来るが、「日記」には前者について多く記されていないため、主として農民・町人を対象とし後者について述べる。

以上のことから幕府と津軽藩の司法制度を詳細に比較することは出来ず、幕藩体制の中で津軽藩をどのように位置づけるか容易ではない。筆

者が三二九七冊に及ぶ「日記」の中から関係事項を拾いあげてみたものの、発表するにはいささか躊躇も感じるが、津軽藩の司法制度解明の一助ともなればと考え筆をとった次第である。

註 (1) 「歴史手帖」第八卷十二号

(2) 蝦名庸一氏「弘前藩御刑法牒(寛政律)」(「弘前大学国史研究」第十五・十六合併号所収)、「安永期の弘前藩刑法と寛政律との比較」(同第十九・二十合併号所収)

(3) 拙稿「安永期の津軽藩刑法についての一考察」法令とその実態」(「国史学」第九十七号所収)、「津軽藩の牢屋について」(「弘前大学国史研究」第六十四・六十五合併号所収)、「津軽藩『御刑罰御定』の成立に関する基礎的考察」(盛田稔学長還暦記念論集、青森県―その歴史と経済―所収)

(4) 「江戸日記」と「御国日記」の二種類あるが、本稿では後者を指すものとし、引用する場合は「日記」と表現する。

一 自分仕置

幕府は早くから全国の各藩に幕府法を遵守すべきことを規定し、慶長十六年（一六一一）四月十二日の「条々」に、^①

一如右大將家以後代々公方之法式可奉仰之、被考損益而、自江戸於被出御条目者、弥堅可守其旨事、

と見える。

これが、寛永十二年（一六三五）六月二十一日に出された「武家諸法度」第二十一条に、^②

一万事如江戸之法度、於国々所々可遵行之事

と規定され、それ以後代々の「武家諸法度」の末条に必ずこの旨の規定がおかれた。

幕府は右のような幕府法の限度を示した上で、大名に対し「自分仕置」を認めた。即ち、元禄十年（一六九七）六月の「私領仕置之儀ニ付老万石以上計江御触書」、^③

一逆罪之者仕置之事

一致付火候者仕置之事

右之科人有之は、遂詮議、一領一家中迄ニ而外江障於無之ハ、向後不及同、江戸之御仕置ニ准、自分仕置可被申付候、但、他所ニ入組候ハ、月番之老中迄可被相伺候、遠嶋可申付科ハ、領内ニ嶋於無之ハ、永牢或親類縁者等江急度可預置候

六月

とある。逆罪・付火については、その犯罪の及ぶ範囲が一領・一家内であって、他領・他家に影響のない場合は、幕府に伺う必要がなく大名が独自に処罰し得るということである。

幕府が各大名に対し自分仕置を許すものとして逆罪と付火をあげたのは、これら二つのものに限定するといったものではなく、自分仕置をなし得る最高限を示したものである。^④幕府の「御定書」によれば、逆罪は磔、付火は火罪で最高刑に処せられた。

津輕藩では同年七月二十三日の「日記」に次のように見える。^⑤

覚

一逆罪之者仕置之事

一致付火候者仕置之事

一生類ニ疵付或損し候者仕置之事

右之科人有之者遂詮議、一領一家中迄ニ而外江障於無之者、向後不及同、江戸之御仕置ニ准シ自分仕置可被申付候、但他所江入組候者、月番老中迄可被相伺候、遠嶋可申付候科者、領内ニ嶋於無之者永牢、或ハ親類縁者へ急度可被預置候、且又生類憐之儀兼々被仰通、弥堅相守入念可被申付者也、

津輕藩の最初の刑罰法「御刑罰御定」（安永律）の規定によれば、^⑥

逆罪は主殺・親殺とも鋸引・磔・獄門・斬罪・重鞭刑追放、付火は火罪が基準で、実際に執行されており、それ以下の犯罪については勿論自分仕置であった。「生類憐みの令」は五代將軍綱吉が貞享四年（一六八七）に制定し、宝永六年（一七〇九）死亡と共に廃止された悪法である。「生類ニ疵付或損し候者仕置之事」は幕府の生類憐みの令にもとづき、津輕

藩がそれを一層徹底させようとしたものであろう。しかし、実際に徹底されたのか疑問は残る。

津輕藩最初の刑罰法は安永四年（一七七五）制定の「御刑罰御定」（安永律）であるが、幕府法を系統的に学んで取り入れた痕跡はなく、藩独自の判例を取捨選択して集録した慣習法である。寛政九年（一七五七）の「御刑法牒」（寛政律）^⑧は中国法の明律に範を求めたものであり、安永・寛政律は自分仕置権の強いものとみてよい。文化七年（一八一〇）の「文化律」^⑨では、前年に制定された隣接の盛岡藩の「盛岡藩律」と同様に幕府法の強い影響を受けるようになる。

註（１）『徳川禁令考』前集第一 六二頁

（２）同右 六五頁

（３）「御定書」上巻第五十五条（『徳川禁令考別巻』所収）

（４）杉山晴康氏『日本法史概論』三〇五頁

（５）「日記」第三四三。（３）と（５）の両史料の関係については、平松義郎氏が『近世刑事訴訟法の研究』（四七頁）でテキストクリティクをしており、生類憐みの令の盛り込まれた史料は福井・岡山藩などにも残っているとされる。

（６）弘前市立図書館蔵

（７）蝦名庸一氏「安永期の弘前藩刑法」（『弘前大学国史研究』第十九・二十合併号）

（８）（９）弘前市立図書館蔵

（１０）京都大学法学部編『近世藩法資料集成』第一巻所収。創文社『藩法史料集成』所収

二 搜索・召捕・預け・入牢・護送

幕府は刑事事件発生後の犯人（または容疑者）の搜索や召捕（逮捕）には、町奉行のもとに町与力と町同心が配され、火付盗賊改では配下の与力・同心が担当した。目明（岡っ引き・口問・御用聞・手先などともいう）は町奉行配下の諸役人の手先として利用されたが、職制としては非公認の私的な使用人にすぎない。

津輕藩では、目明について次のように見える。

元禄十六年（一七〇三）八月十五日に、^①

一町奉行木村八左衛門片岡九左衛門申立候者、秋田之九兵衛と申者五月盗人之儀致訴人候付、御僉議之内町江御預、一日ニ四合扶持宛被下置候、其以後徒者共三四人捕申候、此者盗人之手筋茂能存知候者御座候間目明ニ被仰付候儀如何可有御座候之哉、先年子ノ年（元禄九年カ）只今之目明シ専四郎・源十郎と申者、兩人当分御蔵米拾俵宛被下置、目明被成候得共、源十郎儀致徒、御仕置被仰付候而、其後専四郎老人ニ御座候、此者専四郎並ニ御扶持米被下置、相役申付度奉存候、如何可被仰付候哉之旨申立候付、郡奉行勘定奉行僉議仕せ候処、申立之通尤奉存候旨申候付、民部（家老 森岡民部）江相達之、申立之通申付之、

寛延四年（一七五一）四月二日付のものは長いが全文を引用する。^②
一 四奉行申立候、

宿無 久助

右之者先達而町奉行より申上候通、数度盗徒仕、御追放被仰付候処、被仰付茂不恐、度々立帰候段、重々不屈候、徒者御座候付、先達而四奉行存寄斬罪之儀申上候者ニ御座候、然処段々御僉議被仰付候処、御郡中徘徊之極徒者之居所并見覺之者共数多御座候、右之者共段々御僉議被仰付候ニ付、町同心等遣搦捕申度候共、人相不存、其上居所茂寢と不存候付、今以尋兼罷有候、然者右之通之徒者相尋申候者、兎角其同類等を目明被仰付、御僉議被仰付候得者、相知申儀御座候、其上ニ而久助惡事相止不申候者、其節者如何様ニ茂可被仰付候間、町奉行より申立之通先当分目明被仰付、弥極罪之者共搦捕申候得者、一段之儀と奉存候、久助茂右申上候通、度々立帰候程之不屈者故、無心元奉存候得共、今一度一命御助け、目明迄被仰付候儀ニ御座候者、善心ニ立帰、勤方茂宜候得者、旁御方ニ茂可罷成哉と奉存候、兎角目明と申者盗徒者ニ無御座候得者、其手筋覺不申儀ニ御座候、殊更目明之儀者毎度兩人宛御座候処、近年忝人ニ御座候而御用多候節者差支候ニ付、右之段共沙汰仕申上候、如何可被仰付候哉之旨申出之、織部（家老 西館織部）江達之、伺之通申付之、

目明は弘前城下では町目付の下にあり、右の史料によれば定員二名で蔵米十俵が給せられていた。九兵衛と久助は窃盗の前科者であり、町奉業が彼等を逆を利用して犯罪捜査・召捕に効果をあげようとしたものである。所謂「毒をもって毒を制する」という便宜主義が生んだものである。しかし、九兵衛はその後目明の職権乱用で南部口（盛岡藩境）より追放を申渡され、久助も目明でありながら寛延四年十一月弘前城下の笹村五郎次の家より脇差を盗んだことが発覚し、磔を申渡された。

元禄八年の凶作飢饉で領内の犯罪が激増し地獄絵と化した時は別として、右のことから平常でさへ召捕に支障があったことが知られ、津輕藩でも前科者を利用したものと推定されよう。

なにか怪しいふしがあつて、吟味が始まると入牢とまで行かないものは、その身の居住場所によつて村預や町預がある。しかし、預となる軽重の程度やその期間ははっきりしないが、村預や町預の期間が長くなると、村や町の重い負担となり、それを軽減するため入牢とした。その後取り調べの結果無罪放免となれば、その人達は周囲から冷い眼で見られたようである。そのため農民や町人（下級武士をも含む）等で容疑のはっきりしない者や軽い罪の者は、文化二年（一八〇五）十月弘前城下の馬喰町にある牢屋の一郭に揚屋が新設されてからはここに収容された。入牢（揚屋も含めて）には未決囚の拘禁と刑罰としての二種類があり、両者の区別が判然とせず、一年未満から二十年以上に及ぶかなりの幅があり、歴代藩主等の法要その他の執行に際して大赦が実施されていることが「日記」に散見する。

藩から江戸への護送については、寛政五年（一七九三）十二月二十三日に次のように見える。

一 附添御徒目付道中心得書左之通、

覚

此度御用之者江戸表江被差登候ニ付、各着（「附」の意カ）添遣候間、駕籠前後ニ附昼夜無油断罷登可申事、
一道中廿日振と可被相心得事、

但朝六時過罷出、晩七時過宿着致、必夜中旅申致間敷事、

一 船川渡并險阻罷通候節、別而心を附可申事、

一 於道中駕籠之側江他所者寄せ申間敷、尤大小便之節、随分無油断附添、駕籠⁵出候節ハ腰繩を付、大切ニ取逃シ不申候様可致事、

一 食事之節者駕籠⁵出シ不申、駕籠之内ニ而給せ、尤箸者三寸箸相用可申事、

但食事之儀、一日三度給せ、尤魚肉等相頼候者とけ等無之様随分入念吟味之上給せ可申、其外酒・多葉粉并異食等決而致せ申間敷事、若不時ニ喰物等好候者、飯給せ可申事、

一 附添之面々酒給候儀堅無用可致事、尚又猥ケ間敷儀無之様急度相慎可申事、

一 夜中駕籠之近所ニ臥、堅ク用心可致勿論、附添登之者之内、両目付三四人宛不寝番相勤、其外之者共茂駕籠を取巻、同間ニ臥可申事、

一 泊々ニ而宿之勝手与得見置、出火・地震其外変之儀共有之候者、駕籠之前後ニ附添、無滞立退可申事、

一 道中ニ而御用之者病氣等之節者其所之医者を頼、療治可致、万々一病死等致候者、塩詰ニいたし為差登、尚又両目付之内早速江戸表江罷登、其旨可申達事、

右の八カ条には護送に要する日数、大小便の際の注意、食事のさせ方、夜や不時の際における駕籠の護衛、病氣や病死の時の取扱い方、付添者の執務態度等が具体的に示され、厳重な護送の様子が知られる。そのほかに「日記」には①元禄四年閏八月十六日、②享和二年（一八〇二）九月十五日、③文政四年（一八二二）六月七日、④弘化四年（一八四七）九月五日にも見えるが、寛政五年の八カ条と内容がほぼ同じである。護

送日数は、①は十六日、②は記入なし、③十九日、④十九日、寛政五年が二十日とあり、十六日～二十日で江戸へ到着したことが知られる。

江戸から弘前城下への護送には武士階級と思われるものの二例のみだが、右の史料と大差はなく、日数は十七日と二十日であり、江戸まで要する日数と同じくらいと思われる。

註（１）「日記」第五一八。印と（ ）は筆者による。

（２）「日記」第一八五一。印と（ ）は筆者による。

（３）『弘前市史』藩政編二〇五頁

（４）「日記」第五六五。宝永元年十一月十二日

（５）「日記」第一八七二。宝暦二年六月六日

（６）拙稿「津輕藩の牢屋について」（『弘前大学国史研究』第六十四・六十五合併号所収）

（７）「日記」第二三四七。元禄四年閏八月十六日付の護送規定が、「日記」に記載された最も早い時期のものと思われる。しかし、これは長文にわたるが、寛政五年十二月二十三日付の簡潔な規定とほぼ同内容であるため、引用に際しては後者を使用した。

（８）同右 第二三四

（９）「日記」第二四四九

（１０）同右 第二七〇一

（１１）同右 第三〇八四

（１２）弘前市立図書館蔵「御用格」（寛政本）第二十一 咎人御国下シ。天明七年三月二十二日で二十日間

「日記」第三〇四五。天保十五年七月二十六日で十七日間。

三 取調べ

幕府では江戸城下で容疑者が逮捕されると、目明などにより簡素な取調べが自身番屋で行われた。その後容疑者が町奉行所に送られて与力が取調べ、あらかじめ調書を作った上で町奉行が取調べたのである。その結果、奉行より入牢証文が出され入牢が決定すると、一件書類は奉行所の吟味方へ、また容疑者の身柄は牢屋に送られる。

与力は容疑者を牢屋から呼出して取調べ、自白すれば「吟味詰り之口書」を作成して奉行が裁判を実施した。取調べに対して被疑事実を否定し、口書を容易に作れない者に対しては拷問が許された。

「御定書」下巻「八十三 拷問可申付品之事」によれば、^①

一人殺 享保七年條

一火附 同

一盜賊 同

元文五年條

一関所破

一謀書謀判 同

右之分、悪事いたし候証拠儘ニ候得共、不致白状もの、并同類之内白状いたし候得共、当人不致白状者之事、

一詮議之内不決、外ニ悪事分明ニ相知、其科ニ而死罪可被行もの之事、右之外ニも拷問申付可然品も有之候ハ、評議之上可申付事、

追加

寛保二年
延享二年條

但、拷問口問之節、立合之もの差越、吟味之様子申口得と承届候様ニ可申付事、

とある。右によれば、殺人、放火、窃盗、関所破り、謀書謀反の五つの犯罪の容疑者で、確実な犯行の証拠があるにもかかわらず自白しない者、共犯者が自白したにもかかわらず自白しない者、まだ裁判が継続中だが、他の犯罪事実が明らかとなり、それに対して死刑が行われる者については、まず拷問が許された。それ以外の者に対しては、評定所での評議を経た上で拷問を申しつけることが出来たのである。

拷問は釣責^{つゑせ}すなわち牢屋内の拷問蔵で両手を縛って、天井より釣すものである。このほか、海老責^{えびせ}、石抱、笞打も今日の意味では拷問であるが、当時は牢問と呼ばれて区別されていた。^②

津輕藩では、郡奉行・勘定奉行・町奉行の職務に「刑律方」というものがある。しかし、その役所があるというのではなく、刑事事件は主としてこの三奉行の管轄であった。郡奉行・勘定奉行についての記事は、ほとんど記載されていないのでよくわからない。出てくるのは町奉行の管轄が多く、町奉行の下に「人別調役」が属し、四民の戸籍を調査して整理するのが職務であったが、裁判事務をも担当したのである。^③

元禄九年（一六九六）に盗賊改め奉行が設置された。^④これは前年の大凶作で領内の治安が悪化したことによるものであり、この役職は常設ではなく、治安の回復と共に廃止されたように思われる。しかし、入牢前の取調べについて、その役人、場所、方法等はほとんどわからない。

容疑者が入牢となって取調べを受ける場合、町奉行の支配下にあった附属吏としての牢屋の役人は次の通りである。^⑤ 牢奉行は定員三名、役高

は俵子四十俵二人扶持、牢屋敷を管理したものとされる。その下に牢守があり定員二名、役高は二十俵二人扶持、牢屋番人を監督したと思われる。牢屋番人は定員十三名、牢屋の番人及び雑用に従事したものであろう。

取調べについては、享保十年（一七二五）六月八日の「日記」に次のように見える。

一三奉行申立候者、櫛引長益入牢被仰付置候、御詮議之筋問懸共ニ沙汰仕可申上之旨被仰付候、（中略）、先達而之通、平問ニ而者白状仕間敷与奉存候、左候ハハ拷問ニ而承候様可被仰付候哉、工藤久悦儀者先達而白状仕候長益申分ニ御詮議可被仰付候哉、自然引合承不申、不叶筋も御座候ハハ、引合相尋可申候哉、沙汰仕候趣申上候旨申出、校尉（家老の津軽校尉）江達、先平問ニ可仕候、引合ハ勝手次第と申付之、

右によれば、入牢となった容疑者の取調べは平問といった。これは拷問の前に行われる普通の取調べのことと思われる。共犯者があった場合、自分が否認しても相手が自白すれば、二人を合わせて否認から自白にみちびいたものであろう。平問で自白しなければ、次の段階が拷問である。

幕府法では前述のように、拷問は拷問蔵での釣責だけであった。津軽藩では天和二年（一六八二）九月二日に、

一栗原市右衛門草履取八助与彦大夫と引合、其上ニ而落着不致候ハハ、彦大夫義拷問籠江入、釣置可申由（下略）、とあり、拷問籠での釣責である。

そのほかに天和三年十一月九日に、

一波岡村助十郎儀兼而庄右衛門様ニ而拷問可被仰付由ニ而、今晚彼所ニ而水攻ニ被仰付候由（下略）

元禄五年十二月六日には、

一今晚於会所、碇ヶ関村清八・同類権兵衛あひせめ拷問申付（下略）、と見え、水責と海老責が拷問として扱われており、幕府のような拷問と牢問の区別はなかったように思われる。また早く自白させるために次のような道具も拷問に使用された。即ち享保九年七月二十五日に、

一四奉行申立候者、科人拷問之儀於江戸そこらと申者ニ而拷問被仰付候而、科人茂早ク白状仕、後之痛ニ茂不罷成由、右そこらの仕懸而拷問致候儀、委細被仰聞候趣沙汰仕可申上由被仰付候（下略）、とあるが、「そこら」の構造等はわからない。また、どの程度の犯罪を自白させるために拷問が行われたのかもはっきりしない。

さらに若年の者に対しては次のような処置がとられた。

現責之事^①

一揚屋入之内工藤元右衛門子仲三郎儀段々口聞詮議仕候得共、申分相分り不申間、拷問責可申付候得共、幼若之者ニ付、拷問茂相成申間敷候間、現責之上問方可申付旨同之通、

文化七年四月

現責とは自白を引き出すために、睡眠をとらせなくて取調べを続けることをいうが、右の史料によれば、幼若の者にはいわゆる拷問ができないため、眠らせずに長時間継続して取調べを行うというものである。その結果眠いのを耐えきれず、比較的早く自白したものである。「幼若」とは未成年を意味するのであろうが、正確な年令は不明である。

文化七年（一八一〇）に制定された津輕藩の「文化律」に次のように見える。¹²⁾

三〇 拷問申付者之事

御定書斟酌

1人殺 火附 盜賊 謀書謀判

右の分悪事致候証拠隨に候得共、不致白状者、竝同類の内白状

致候得共、当人不白状の事、

御定書

2 詮議の内不決外に悪事分明に相知れ、其科にて死罪に可被行者の事はこれは前述の幕府の「御定書」下巻「八十三 拷問可申付品之事」の規定とほとんど同じで、津輕藩では「文化律」の段階に至って、幕府法の影響を大きく受けたものといつてよい。「文化律」に拷問が規定されたことは、これまでの拷問に対し今後の基準を示したことになる。これにもとづく拷問の具体例が「日記」に見えないのは、拷問が行われても日記役が敢えて記載しなかったか。または幕府が文化初年以降拷問はほとんど行わなかったことの影響もあろうか。

牢内の囚禁具にふれておく。天和二年十一月九日に、¹³⁾

一 青森籠之者（中略）籠奉行申立候書付之内年寄候兩人者首か。ねを免、

籠之内ニ差置可申候（下略）

とある。右によれば、青森の牢屋内で入牢者に首枷をしていたことが知られるが、弘前城下の牢屋の外に青森にも牢屋があったのである。

文政八年（一八二五）六月二十一日に、¹⁴⁾

一 牢奉行申出候、右春庵（栖林春庵）足鉄懸置候様被仰付候間、昨日

より足鉄懸置申候、尤手鉄之儀者被仰付無御座候間、懸置不申旨申出達之、

と見える。足鉄は（足枷）、手鉄は手錠（手鎖）の事と思われる。

享保十九年九月十三日には、¹⁵⁾

一 牢奉行申立候者、牢舎之内長尾戸左衛門家来沖右衛門左右之手縄す

れ御座候而（下略）

とあり、いうまでもないが手縄もあったことが確認される。

首枷・足枷・手錠・手縄等の構造や使用法は具体的にわからないが、幕府の囚禁具である手鎖・錠・牢内縄の三種類に準ずるものとみてよいのではないか。しかし、すべての入牢者が囚禁具をつけていたわけではないであろう。

元文五年（一七四〇）十月二日に次のように見える。¹⁶⁾

一 於江戸東叡山当月六日より八日迄御法事有之候付、御法事中拷問・

手鎖・牢舎或者縄懸候類之儀可為無用事、右之通惣触申付旨大目付

江申遣之、

これは江戸の寛永寺で法要が行われるため、津輕藩では十月六日より八日までの三日間拷問・手鎖・入牢・縄懸を遠慮するというものである。

幕府にならい、判決の期日（後述四参照）や刑の執行日（後述五参照）と共に藩主等の精進日・祥月にはこのような事の執行は除外された。

註（1）『徳川禁令考』別巻一一九頁

（2）石井良助氏『法制史』二二二頁（山川出版社「体系日本史叢

書」四所収）

（3）工藤他山『津輕藩官制・職制』（国立史料館・弘前市立図書館

館蔵)、『弘前市史』藩政編二〇四頁

- (4) 「日記」第三〇六 一月二十四日に岡半兵衛・溝口兵左衛門・唐牛十郎右衛門の三人が見える。

(5) 弘前城下の馬喰町にある牢屋の役人である。

- (6) 「日記」第一〇九九。印と()は筆者による。

- (7) 「日記」第一〇七 拷問籠については延享二年(一七四五)六月一日(「日記」第一七五五)に、

一牢奉行申立候、

拷問牢壱ツ 幅壱尺六寸 高貳尺三寸(以下略)

と見え、大人を吊すことの出来るほどの大きさではない。彦大夫が吊されたのは、牢内にあった幕府の拷問蔵にあるような所ではなかったか。津軽藩の牢屋については平面図が残っておらず構造は詳細不明。

- (8) 「日記」第一二四

- (9) 同右 第二五八

- (10) 同右 第一〇七六。印は筆者による。

- (11) 「御刑法書之写」(弘前市立図書館蔵)

- (12) 「青森県刑法・警察史(文化律)」(弘前市立図書館蔵)。

これは青森県警察史史料編集委員中村元吉氏によって史料として復刻(ガリ版刷り)されたものであるが印刷ミスが多い。尚、盛岡藩の『盛岡藩律』(京都大学法学部編『近世藩法資料集成』第一巻所収。創文社『藩法史料集成』所収)も津軽藩とはほぼ同じである。

- (13) 平松義郎氏『近世刑事訴訟法の研究』七九七頁

- (14) 「日記」第一〇九。印は筆者による。

- (15) 同右 第二七五三。印と()は筆者による。

- (16) 同右 第一三六三。印は筆者による。

- (17) 同右 第一六二四

四 裁判と判決

幕府に於ける裁判の種類は、將軍御直裁判、上聴裁判、御大老・老中宅裁判、若年寄宅裁判、上使裁判、一座掛裁判、五手掛裁判、三手掛裁判、御目付立合裁判、同役立合裁判、奉行の手限り裁判等に分けられる。その中でも評定所で行われる裁判には、閣老直裁判、三奉行立合裁判(二座掛り)、五手掛裁判、四手掛裁判、三手掛裁判、月並立合裁判、式日寄合裁判の七種類がある¹。また評定所の定式集会は次の二種類に大別され、立合(月並立合裁判のこと)は毎月四・十三・二十五日、式日(式日寄合裁判のこと)は毎月二・十一・二十一日であった²。法廷は評定所のほかに名主・寺社奉行・町奉行・勘定奉行宅等が使用された。

吟味筋の裁判に於いては、最初は奉行によって吟味がなされるが、留役または与力が聴問の要点をあらかじめ記しておき、それにもとづいて吟味を行ったようで、奉行の吟味は形式的・儀式的なものであったと伝えられる。それゆえ、実質的な審理は奉行による冒頭の吟味が終わったのち、留役または与力によって行われ、容疑者の供述による自白が得られた時は、その供述を記録した「吟味詰り之口書」が作られ、これをもとにして有罪判決がなされる。自白を得て口書を作ることが出来なかった

場合は、「察度詰」として自白以外の証拠にもとずき奉行が犯罪事実を認定し、その奉行の判断を容疑者が承認し押印をする手続が行なわれる。^③町奉行が容疑者を調べるのは一人の容疑者に対して二回か三回ぐらいたいていの者は三回ぐらいで申渡し（判決）である。^④

諸奉行の手限物以上の刑にかかわる案件は、その仕置について老中に伺いが出され、さらに、たとえ三奉行の管轄に属すると思われるものであっても、先例のないもの、疑義にわたるもの、重要な事件については評定所が管轄権を持っていたのである。^⑤

津輕藩の裁判については携わる役人に関して「三 取調べ」の項で触れてはあるが、機構等ほとんど不明であるといつてよく、評定所を中心に断片的すぎるが触れてみたい。

法廷は弘前城内の三之丸の一郭にあった評定所のほかに、名主・町奉行・寺社奉行宅等が使用されたものと推定できよう。

評定の期日は明和五年（一七六八）十月一日に、^⑥

一今日町奉行江口達書相渡候左之通、

評定日 十一日 二十六日

公事訴状并書拔ニ而詮議申付候儀、月番町奉行宅ニ而直ニ可承事、

右外不時差懸候儀者不時ニ而茂可承事（以下略）

とあり、原則として毎月十一日と二十六日の二日であった。

馬喰町の牢屋から引き出された入牢者は、堀に沿って大浦町を南に進み東外門から三之丸に入り評定所に到着した。^⑦

評定所での審理は元禄十六年（一七〇三）十月二十二日に次のように見える。^⑧

一 瀧川主水（家老）被相渡候書付左記之、

覚

一 於評定所口聞者有之候節、口聞かけ候得而其科人白砂ニ差置、其所ニ而外之御用儀沙汰被致、其内口聞者者相止罷有候由、以後者御作法之通口聞者一通り之儀取扱被申可然候事、

一口聞被申候様上座より段々其間様不相済候之内ニ、其次或者末座江飛候得而、与風問懸ケ被申儀有之由上座より聞、其仁是迄と申儀を承、段々存寄せ承申、御作法之通猥ニ無之様以後御心得可然候事、一出座連座之儀茂みたらしく無之様ニ先々被仰付候御作法、評定所之御式法之諸事猥不申候之様、新役衆茂古法を能先々之御役人中尤御書付等能々見覚被申候様ニと存候事、

右之通御書付ニ而被相渡候付、則御役中江申渡之、

これは裁判を司る役人の心がまえを述べたもので、評定所に引き出された者に対しては審理の作法に則って行うよう定めている。

明和五年十月一日の「日記」によれば、^⑨町奉行宅での裁判では町年寄・町同心等のほか御徒目付一人が詰めており、評定所では通常は四奉行（寺社奉行・町奉行・勘定奉行・郡奉行）が出席し、重い犯罪に関して は家老・用人も列席している。

申渡し（判決）の時に出席した役人の身分や人数については、被告の身分（武士・農民・町人等）、犯罪の種類、同時に判決を受ける人数等により多少違ってくるが、「日記」に見える多数の判例から大体の傾向を把握してみたい。^⑩

牢前での申渡しには月番の徒目付があたったようで、斬罪と死罪（屍

体は新刀の様斬りに使用)のほか追放も申渡され、牢奉行・足軽目付・町目付・町同心等が出席している。

取上の御仕置場では馬廻があたり(「寛政律」が制定された寛政九年以後は徒目付が申渡す)、火罪、磔、獄門、斬罪のほか、鞭刑のうえ追放刑とすることが申渡され、徒目付・足軽目付・町同心・縄取人足・太刀取等の出席。

評定所では大目付または目付があたり、武士階級だけでなく農民や町人等も斬罪や追放が申渡され、四奉行・徒目付・足軽目付・町同心等が出席した。農民や町人等に対する申渡しは、断定はできないが延享二年(一七四五)頃から町奉行・町年寄・代官・庄屋宅等で行われるのが多くなるように思われる。

安永三年(一七七四)頃からは村端や町端で徒目付が追放等を申渡すことも行われるようになり、足軽目付・町同心警固・町同心・縄取等が出席している。しかし、寛政五年以後幕末までの「日記」に見える判例には申渡しの役職名が記載されなくなる。そのため、これまで行われて来た方法を踏襲したのか、さらに整備されたものかは判然としない。

註(1) 笹間良彦氏『江戸の司法警察事典』六七頁。九九一〇七頁

- (2) 松平太郎『江戸時代制度の研究』六八一〜六八二頁
- (3) 杉山晴康氏『日本法史概論』三一六〜三二一頁
- (4) 笹間氏前掲書一四六頁
- (5) 杉山氏前掲書三二四頁
- (6) 「日記」第二〇三〇

(7) 同右 第一六八八 寛保二年九月二日

(8) 同右 第五二四 ()は筆者による。

(9) 註(6) 参照

(10) 「日記」の記載方法は藩政期を通じて一貫しているが、細かい部分については時期によって違ってくる点、凶作飢饉によって社会不安が増大して犯罪が増加した時はすべての判例を記載したとは思われない等の問題は残るが、膨大な判例数の分析からは客観性はあると思う。

五 刑の執行

刑罰には農民・町人、武士や僧侶等の身分によってそれぞれ違いがあるのはいうまでもない。津軽藩の「安永律」・「寛政律」・「文化律」は主として農民・町人を対象とするが、これらに規定されている刑罰の種類とその実態については別稿に譲る。

刑の執行は判決後であるが、幕府では死刑を八・十・十二・十四・十七・二十二日等の歴代將軍の忌日には行わず、また臨時の大祭とその前夜は避けるのが例となっていた。^①

津軽藩でも幕府に準拠し、元禄九年(一六九六)八月二十七日に斬罪は「御公儀御精進日。御匠月八前日朝より当日共両日無用ニ可仕候(下略)」と見える。^②元禄十三年十二月七日に御仕置日として「二日六日九日十日十一日十二日十八日廿六日晦日(下略)」とあり、さらに享保七年(一七二二)九月八日には「三日六日七日九日十一日十二日十三日十

九日廿一日廿六日（下略）」とあり、年代によって違いはある。また安永四年（一七七五）閏十二月十一日に、

一 近年死刑者御煤取以後者難成趣御座候間、公儀御定落合大右衛門を以問合候処、煤取者十三日之由、十二月廿七日迄、正月者十三日より死刑被行候段申出候ニ付、右之趣達尊聴候処、公儀ニ而茂右之通被行候ハハ、事ニ寄差支ニ茂可罷成候間、此方ニ而茂以来右之通相心得候様（以下略）」、

と見え、死刑は十二月二十八日から翌年正月十二日迄の期間、行わない事になった。さらに寛政四年（一七九二）十二月九日に、

一 冬至中死刑者勿論、都而之凶事向御用御取扱以来御斟酌可被成由、天明四年十一月被仰出候処、又今日被仰出候者、右冬至三日前冬至中御刑法不被行候旨、右凶事向書付差出之儀ハ、冬至中ニ而も不苦旨、以来右之通相心得候様被仰出候、

とある。以上によって天明四年（一七八四）十一月以降に於いて冬至三日前から冬至まで、及び十二月二十八日から翌年正月十二日までが刑が執行されなかったことがわかる。しかし、この期間中に死刑だけでなくその他の刑罰の執行された記録もないから、この期間はすべての刑が執行停止されていたのかもしれない。

江戸時代を通じて歴代將軍の忌日等は増え、刑の執行日に変更はあり、津輕藩でも幕末迄に季節や忌日等により変更はあったであろう。

刑の執行場所は村端・町端・牢前・取上の御仕置場である。村端・町端では追放や鞭刑が主であるが、斬罪や獄門等が見せしめとして行われた場合もある。牢前では斬罪・死罪等が行われた。

刑場は弘前城下の東端に位置する取上御仕置場の一ヶ所である。死刑は「安永律」の規定では鋸引・火罪・磔・獄門・斬罪・下手人（解死人）の六種、「寛政律」では斬罪・獄門・磔・火罪、「文化律」では下手人・死罪・斬罪・獄門・磔・火罪となっている。下手人は単なる死罪で、首を刎ねてその屍体を取り捨てる。「解死人」とも書かれた。死罪は下手人と同様斬首であるが、その屍体は新刀の斬れ味を試みる「様斬り」に使用され、牢前で執行された。斬罪は死罪と同じだが、取上の御仕置場に於いて行われた点で異なった扱いとなっている。

町中引廻しの行列は、天和三年（一六八三）九月五日の磔になった罪人四人の例では、三列の縦隊で先頭は三人でその中央の者が紙旗を持ち、両側には棒を持った町同心が各一人宛、二番目の列は三道具を持った人足が三人、三番目の列は拔身槍を持った者三人、四番目の列は町同心三人、その次は罪人で縄下げにされて一人ずつ馬に乗せられており、両側に町同心が一人ずつ（五・六・七・八番目）、九番目の列は町同心小頭が一人真中におり、十番目は拔身の槍を持った者が三人、十一番目は町同心三人、一番後が三道具持ちの人足三人で都合三十人が罪人の前後を固めて市中を引廻した。当時の引廻しの道順は博労（馬喰）町の牢屋より亀甲町へ廻し、黒石町・東長町・代官町・土手町を通り、土手町の橋近くにあった札の辻に一日晒したのである。安永六年九月二十七日に高畑村の喜助が火罪になった際の引廻しの道筋は、牢屋・亀甲町・紺屋町・袋町・誓願寺前・江戸町・荒町・茂森町・横鍛冶町・本町通・五丁目・親方町・土手町・富田町・取上御仕置場へと通っている。幕末までに行われた引廻しの行列の人数や道筋には晒になった後の執行等により違

いはあるが、大きな差はなく基本的には同じと思われる。

磔や獄門の執行直前の様子は天和二年十二月十九日に、^⑩（上略）右之

場所江見物之者大勢取込候儀、又ハ科人之諸親類参候而盃杯仕候様成

儀堅為仕間敷事（下略）、

とあり、見物や親類の者達の別れの盃は禁止されている。また刑の執行

中は付近の道路の往還も停止された。^⑪

刑の執行に際しては罪人の向く方向は元禄十一年三月二十五日に^⑫

一明日於取上火罪并獄門等近年西向ニ致申付候由、岩木山江真向にて

御座候間、北之方江向候得而も大光寺海道にて往還之者茂成程見申

儀ニ御座候間、北向ニ申付候儀可然と奉存候、年々天氣荒申茂ケ様

之儀にて茂候半哉と、去年茂世上ニ而申成候、奉窺旨大道寺隼人江

相達候処、弥其通可然由被申、則北向ニ申付候様ニと町奉行江申渡

之、

と見え、領内の霊山としての岩木山に対する信仰上からの遠慮があるよ

うに思われる。磔・獄門・火罪の執行後に三日三夜にわたり晒しとなった。^⑬

註（1）笹間良彦氏前掲書二三一頁

（2）「日記」第三二〇

（3）同右 第四三八

（4）同右 第一〇一一

（5）同右 第二一一九。印は筆者による。

（6）弘前市立図書館蔵「御用格」卷二十一（從寛政三年）御仕置。

。印は筆者による。

（7）『弘前市史』藩政編二八四、二八五頁

（8）「日記」第一二二

（9）同右 第二一四〇

（10）同右 第一一一

（11）同右 第一三五。貞享元年十二月二十一日

（12）同右 第三五七

（13）同右 第二五五六。文化七年九月十九日

むすびにかえて

以上、搜索・召捕から判決による刑の執行まで制度史的に述べて来たが、「日記」に見えるこれらの記事は「安永律」の制定・施行の頃まで比較的多く、「寛政律」・「文化律」の段階になると少くなる（日記役による日記の記載方法に問題は残るが）。そのため「安永律」・「寛政律」・「文化律」の制定・施行と共に、司法制度にどのような変遷がみられたのか幕府法と比較しつつ津軽藩政の動きの中で詳細にあとずけることが困難であるといえよう。これまでの考察によって藩内での取調べは村預や町預となつて行われるほかに、弘前城下の牢屋で行われたが、裁判・判決は城内の三之丸にある評定所で武士・町人・農民等に対してなされたのである。しかし、延享二年（一七四五）頃から武士と分化して町人・農民等は町奉行・町年寄・代官・庄屋宅等で判決が下されるようになり、安永三年（一七七四）頃から町端や村端でも判決が申し渡されるようになる。しかも文化二年（一八〇五）には牢屋の一郭に揚屋が完成した。「寛政律」段階までは幕府法に準拠しつつも自分仕置権が強

く、「文化律」の制定で幕府法に接近同化の現象が見られる。したがって津軽藩独自の司法制度の特色を残しつつも、次第に整備され幕府法の影響を強く受けるので藩独自のものが少なくなり、「日記」にも記載されなくなることもあったと思われる。

（青森県立弘前実業高等学校教諭）